



江戸東京博物館友の会会報

目次

平成 17 年度 定期総会に出席しよう	1	「足立史談会」を訪問／「会議・会合日誌」	7
友の会セミナー『東海道五十三次「山あり川あり」』	2	まんが『源内さんの江戸博さんぽ その4』	8
友の会セミナー『古文書で読み解く忠臣蔵 その2』	3	えど友プラザ『東京にある富士山のナゾ』	8
見学会『＜江戸四宿を歩く＞千住宿—その1』	4	『伝統行事・芸能を訪ねて』	9
古文書講座 好評のうちに延べ参加者約 1,500 名	5	えど友サークルだより	9
見学会『常設展を見る～火消年代記』	5	江戸博界隈③『旧安田庭園と天ぶら・天亀八』	10
見学会『相撲史跡探訪 その2』	6	催事案内	11
江戸博クリップ『渋いはなし』	6	会員優待のお知らせ	12

平成 17 年度 定期総会に出席しよう

5月27日(金)午後1時30分から開催 ～竹内館長の記念講演も予定～

江戸東京博物館友の会は、平成 13 年 5 月の設立総会から今年で 5 年目を迎えました。

この間、会員数も増えて約 1000 名になり、活発な活動が展開されています。昨年度は、博物館のご協力による内覧会を 5 回、友の会独自の古文書講座を 3 期・3 講座、各 3 回の合計 27 回、各界でご活躍の講師をお招きしての友の会セミナーを 12 回、バスツアーを含む見学会を 7 回開催しました。これらに参加された会員は延べ 3,200 名を超えています。

来年度も多彩な事業活動が予定されており、皆さんの積極的な参加と協力が待たれています。また、こうした企画や活動について皆さんのご希望ご意

見を、できるだけ生かし取り入れて運営していくことが期待されています。

定期総会の日程は次のとおりです。総会は過去 1 年間の活動を振り返るとともに、これから 1 年の活動について会員の総意を結集する場です。多くの会員の皆さんが建設的なご意見をお寄せくださることをお待ちしております。議案書をお読みいただき、ぜひご出席ください。

■平成 17 年度 友の会定期総会

開催日時：5 月 27 日(金)

午後 1 時 30 分

会場：江戸東京博物館・1 階会議室

●主な議案

・平成 16 年度 事業報告(事業部会、

広報部会、総務部会)

・平成 16 年度 会計報告

・平成 16 年度 監査報告

・平成 17 年度 事業計画案(事業部会、
広報部会、総務部会)

・平成 17 年度 事業予算案

・役員選出(改選)

■竹内館長記念講演と懇親会

総会に引き続き、午後 3 時から竹内誠館長の記念講演「天保の改革と江戸」が予定されています。毎年たいへん好評の講演です。ご期待ください。また、午後 5 時から館内 2 階のレストラン・モアで懇親会(会費 500 円)が開催されます。こちらにもぜひご参加ください。

 会員資格継続
 手続きの
 お願い

友の会の会員資格の有効期限は、入会の日から 1 年間となっています。間もなく有効期限を迎える方には「継続手続きのお願い」が郵送されますので、継続ご希望の場合は同封の払込用紙にて年会費の納入をお願いいたします。友の会は会員の皆さまによって支えられていますので、1 人でも多くの方の継続をお待ちしています。

■継続手続きをされませんと、友の会活動への参加や会員特典が受けられなくなりますので、ご注意ください。

東海道五十三次「山あり川あり」

講師 川口順啓さん

(鉄道文学会副会長、(財)JR 東海生涯学習財団 常務理事)



「道」という呼び方

日本の古代(=律令期)における「道」という言葉は道路の意味よりも、行政区画を表す単位として用いられていました。この時代は、東海道、東山道、北陸道、山陽道、山陰道、南海道(四国から淡路国、そして紀伊国=和歌山県を含む)、西海道(九州)の、七つの「道」がありました。

それが時代を経るに従い、行政区画の意味が忘れられ、その区域を通る中心の主要な「道路」を指す言葉となって、今日に至っています。しかし、この「道」の元来の意味が現代に存在している事例が「北海道」です。

古代における主要な道路

日本の古代の主要な道路の重要度の順序は、①山陽道、②東山道(ほぼ中山道に近い)、③東海道、④北陸道であったと考えられています。

東海道の重要度が高くならなかった理由は、大きな川の河口を何か所も横切らなくてはならないからでした。

東海道が最重要道路と位置付けられるようになったのは、武家政権の鎌倉幕府が成立した以降で、それが室町・江戸期を経て今日に至っています。

東海道の経路の変遷

東海道の経路は、時代により少しずつ変化しています。例えば、律令期に関東の東部へ入るための正規の経路は、相模国の三浦半島から対岸の上総国へと船で渡ることでした。これは当時の多摩川が非常な「暴れ川」だったためで、隅田川・古利根川も同様でし

た。また、箱根山は険しいのでこれを避け、富士山のふもと足柄峠を越える道筋が正規の経路でした。しかし、この道筋は平安中期の富士山の噴火で道が不便になったので、しだいに箱根越えが主流となりました。

徳川幕府の道路行政

関ヶ原で勝利した徳川家康は、慶長6年(1601)、東海道の整備を命じました。その翌年以降、中山道や日光・甲州・奥州各街道の整備も命じました。

幕府は、この五街道を直轄とし、その他の道路はそれぞれの地域の大名、代官に任すという方針でした。

そして幕府は、万治2年(1659)、直轄の五街道を管理・監督するための奉行職(道中奉行)を設置しました。道中奉行の主な任務は、街道の整備・保全、宿場の整備、および宿場内の訴訟問題の処理であり、三千石程度の旗本が任命され、大目付と兼務でした。大目付は、大名を監察することが任務でしたが、街道は大名領をも通っていたので、大名ににらみのきく大目付と兼務にしたのです。

また、街道は、天領をも通っていましたが、天領の管理・監督の統括は、勘定奉行でした。道中奉行は、街道行政のために勘定奉行と調整が必要でしたので、後に勘定奉行の一人が道中奉行を兼務することになりました。これ以降、道中奉行は二人制となって幕末に至っています。

東海道の難所

東海道には箱根峠(標高:850メートル)、薩埵峠(同:120メートル)、

宇津谷峠(同:170メートル)、日坂峠(同:260メートル)、鈴鹿峠(同:349メートル)があり、標高は中山道の碓氷峠などに比べれば、さほどではないのですが、東海道では難所でした。

東海道の河川としては多摩川(六郷川)、相模川、酒匂川、富士川、安倍川、大井川、天竜川、矢作川、木曾川・長良川・揖斐川、瀬田川、浜名湖の出口の「今切」があり、これらには橋はありませんでした。例外的に瀬田川には橋がありましたが、その他は渡し船を使うか人足に担がれて渡りました。

特に大井川は、「箱根八里は馬でも越すが 越すに越されぬ大井川」と言われるほどの難所でした。ここでは水量が一定の値を超えると川止め(渡河禁止)になり、水量が下がるまで兩岸で足止めされたので、このように言われたのです。また、大変渡りにくい木曾・長良・揖斐の三川を避けて、熱田・桑名間は海路が用いられました。

関所は自然の障害物ではありませんが、戦国期や江戸期には円滑な通行という意味では難所の一つに入れなくてはなりません。江戸期には、箱根関と今切関=新居関の2カ所があり、このうち箱根関は、江戸に近いこともあり、「入り鉄砲に出女」の言葉どおりに、特に厳重に管理されていました。

東海道は、以上のようなさまざまな問題点を抱えていましたが、人の交通のみならず物資や情報の伝達を円滑に行うという機能を果たす道路でした。そして、中世以降の日本の経済や文化交流に与えた影響はまことに大きかったとすることができます。

【記録】文・写真:広報部会・岡田守弘

古文書で読み解く 忠臣蔵その立

講師 佐藤孔亮さん
(古典芸能ライター)



『梶川氏日記』と『常憲院御実紀』

松の廊下^{にんじょう}刃傷事件を現場に居合わせた者はどう書いているかが本日のテーマです。そこで事件のとき、浅野^{あさの}内匠頭^{たくみのかみ}を「抱き止めた」といわれる留守居番の旗本・梶川与惣兵衛が書いた『梶川氏日記』を中心に見ていきたいと思います。また徳川幕府の公式記録で、事件の100年ぐら以後、いろいろな資料をもとに^{へんさん}編纂された客観的な叙述の『常憲院御実紀』をあわせて読めます。

羽交い絞めへの疑問

まず『梶川氏日記』ですが、梶川は本廊下(松の廊下)角柱から6,7間(約11メートル)のところで吉良上野介と「双方より」出会い、儀式の「刻限が早まった」ことについて立ち話をしていた。そのとき「この間の遺恨^{いこん}覚えたるか」と声をかけ、誰か吉良の後ろから切りつけた。梶川が驚いて見ると、浅野内匠頭であった。吉良が「これは」と後ろを振り向いたところ、また切りつけられます。それで梶川の方へ逃げようすると、またまた切られ、吉良はうつむきに倒れてしまったとあります。そのとき梶川は「片手は内匠殿の小刀^{ちいさな}の鑢^{つば}にあたり候ゆえ、それ共に押し付けすくめ申し候」と書いています。そうだとすれば、当然前から押し付けたわけで、他の資料にも書かれ、芝居などでも見るような、後ろから^{はが}羽交い絞めにはできなかったと思います。

浅野はごく平均的な大名

吉良を悪者にすれば、相対的に浅野は名君にならざるをえません。討ち入り事件が起きたのは、つまり家臣があそこまで忠義を尽くしたのは、主人が名君だったからだ、と、後から理由付けに言われたことです。本当に名君であったかどうかは、事件以前の評判でなければわかりません。元禄年間(1688～1703)、しかも事

件以前に全国大名の人物評を書いた『土芥冠離記』と『謙徳後正』という書物が出ています。それを見ると、浅野が文道をあまり好まない、政治は家臣に任せきり、女好き、短気などとも書かれており、大名としてはごく平均的な人物だったのではないかという感じがします。事件直後に取り乱し、吉良に恨みがあると大声で繰り返すめいたと『梶川氏日記』に出てきますが、さもありなんと思われま

なぜ恨みをもったか

ところで、なぜ浅野が吉良に恨みを持ったかは、『梶川氏日記』ではわかりません。吉良の方でも恨まれる覚えはないと、幕府方から調べを受けたとき言っています。

〈塩田遺恨説〉 吉良が塩田の技法を浅野から教わろうとしたが浅野が断ったためにいじめられたというもの。確かに吉良町に塩田はありました。しかし当時の吉良領は二手に分かれており、塩田があったのは吉田といって大多喜藩の領地でした。吉良領では塩田があったとしてもわずかで、元禄14年(1701)当時、塩田からの上がりの記

録はないということです。

〈賄賂遺恨説〉 賄賂を渡さなかったことによる意地悪や嫌がらせもありえないことです。吉良は儀式全体を取り締まる立場上、何か起きたら責任を取らざるを得ず、あえて浅野に間違いをさせるとは考えられないからです。

〈病氣・遺伝説〉 確かに浅野家の資料には、浅野がその前日から^{つかえ}痞という病で苦しんでいたと書かれています。しかし精神病とも思えないし、痞がどうい病氣がよくわかりません。また母方の叔父がこの事件の20年前、家綱の法事のとき増上寺で喧嘩、大名を殺しており、そういう血が流れているという説がありますが、これも何ともいえないことです。

〈何か手違いの可能性も〉 結局のところ、理由はわからないのですが、ただ一つ言えるのは、浅野が怒っていることです。当日(勅使下向4日日)も儀式の刻限が早くなったことで、梶川が吉良を城中探し歩いているように、取締りの吉良は多忙でした。そのため時刻変更などが浅野の耳に入らなかったとか、遅かったとか、何か手違いが以前にもあったのではないかと私は思うのですが、それを記した資料はなく推論の域を出ません。

『多門伝八郎覚書』への疑問

今日は時間がなく、刃傷・切腹の現場にいた検使日付の記録「多門伝八郎覚書」を読めませんが、多門の覚書には浅野の辞世の歌や、片岡源五衛門のいとまごい、浅野が介錯のときには自分の刀を使ってくれと頼んだなど、よく知られていることがたくさん出てきます。しかし、これらのことが他の資料にまったく見られず、切腹した田村家の記録にもありませんので、私にはどうも納得できません。偽書とまでは言いませんが、多門の書いていることには多くの疑問が残ります。

【記録】文・広報部会 大野晴美

写真・同 佐藤幸彦

千住宿の雰囲気満喫

＜江戸四宿を歩く＞ 千住宿—その1

かつての宿場町を歩こうというテーマ企画「江戸四宿を歩く」の2回目「千住宿—その1」として3月12日(土)に行われました。この日は100人を超える参加者がありましたが、5班に分け受付順に一定の人数になったらスタートする方式が成功し、参加の皆さんにも好評でスムーズな見学会となりました。

千住は日光街道、奥州街道の初宿であり、水戸街道、下妻街道への分岐点でもありました。そしてこのような交通の要所だっただけでなく、米穀、青物、川魚などの問屋が建ち並んだ流通の拠点でもありました。こうした背景から生まれた千住独自の文化を往時のにぎわいなどを想像しながら蔵と路地の町を散策し味わおうというのがこの見学会の主旨です。

集合場所の北千住駅前から駅前商店街を行くと、右側にあるのが大橋眼科でさながらヨーロッパの古い館といった風情です。大正6年(1917)からあった西洋館を昔のイメージを残しながら昭和57年(1982)に建て替えた医院で、ステンドグラスなど骨とう品のような部品が建物の随所に取り込まれています。

この近所にお住まいで当日参加の女性の話では、今でもこの女性看護師は明治時代のイメージの白衣で診療に



▲明治の洋館を思わせる現役の大橋眼科

あたっているとかで「古い時代の建物の夢と楽しみを知ってもらおう」という院長の思いには敬服するばかりです。

社殿の彫刻が見事な本氷川神社、カンカン地蔵で知られる安養院を見てしばらく行くと、江戸時代から続く“骨つぎ”の本案・名倉医院です。この日は休診でしたが、風格のある立派な建物と蔵を見ることができました。昔はここへ来る患者専門の宿屋が5軒もあったそうです。今でも「金町屋」という旅館が1軒営業しています。



▲1班と5班が横山家前で行き交う

次いで、昭和に入ってから2回改築されてはいるものの万延元年(1860)の建築という、もと紙問屋の横山家です。ここで最初にスタートした1班と最後の5班が行き交い、えど友の旗を振り合いました。運良く横山家の現当主の説明が聞けた班もあったようです。

その向かい側にある「絵馬屋」は天保のころから続いている東京でただ1軒の店で、おそらく絵馬を作って売っているのは日本中でもこの店だけではないかと言われているそうです。

ここでちょっと脇道に入って“からたち寺”の名で親しまれている長円寺、元禄4年(1691)創建といわれる氷川神社に寄りました。もとの道に戻り少しばかり行くと高札場公園で



▲旧やっちゃ場跡を示す看板

す。ここで休憩後、本陣跡、検番横丁跡などを見ましたが、もう少し日につく説明板のようなものがほしいところです。次の勝専寺は一名「赤門寺」とも呼ばれるだけあって、小規模ながら見事な赤門が目を引きます。

貫日役所跡、一里塚跡などを見て、ワカタ薬局の蔵がいいというのでよく見ようとしたのですが、周りの建物が邪魔して無理でした。次いで掃部宿(現在の千住仲町)の開拓者・石出掃部亮の墓のある源長寺を見学しました。

そして千住卸売市場だった「旧やっちゃ場跡」です。昭和36年(1961)の東京の市場統廃合により閉鎖されましたが、かつての賑わいを示す看板が掲示されています。その起源は秀吉時代ともいわれ、江戸時代から明治、大正を経て昭和に至る深い歴史が刻み込まれているように思いました。

日露戦争の戦勝記念碑のある氷川神社、現在は歯科医院の木造の洋館、森鷗外の居住地跡などを見て、最後は金蔵寺です。天保の大飢饉の「餓死者の供養塔」や「千住宿遊女供養塔」があります。台石にびっしり刻まれた遊女屋の屋号や遊女の戒名から往時がしのべられます。

この日の参加者はアンケートによると20～80歳代におよび、皆さん楽しんでいただけたようでした。

【取材】文・写真：広報部会・松原良

古文書講座（2004/6～2005/3）

好評のうちに 延べ参加者約 1,500 名

3 講座 3 期で計 27 回開催

古文書講座は入門編、初級編①②の3講座があり、平成16年6月より平成17年3月まで、それぞれ第1期、第2期、第3期と各3回、計9回行われました。

受講者はクラスによって変動がありますが、大体各クラス50人から80人です。延べにすると1,526名の会員が参加しています（事業部会調べ）。友の会催事の中でも参加者の最も多いものと言えます。

講師は学習院大学博士課程の大学院生の出講をいただいておりますが、懇切丁寧な解説と豊富な資料を使つての講

義は受講者から好評を得ています。資料は旧幕引継書などの公式文書から各藩文書、各種文庫など江戸東京博物館所蔵のマイクロフィルムなどから主に取材しています。

実施した講義内容の一端を以下に簡単に紹介します。

入門編

旧幕引継書や鮎江藩文書などを題材に古文書解読の基礎やくずし字解読のコツなどの講義を受けました。將軍代替わりと誓詞、將軍／世子と江戸城など江戸時代の大名家統制について理解を

深めることができました。

また、国もとにおいて日々生起するさまざまな事件の記録を読みました。

初級編①

榊原家文書から「天明の江戸打壊し」に関する町人の残した記録を読み、旧幕引継書から「江戸時代の相撲について」上覧相撲や土俵について勉強し、牧野家関係資料から「幕府の儀礼と大名」などの講義をして頂きました。

初級編②

徳川幕府の南北町奉行が関わった公文書記録による旧幕引継書のうち「市中取締り類集」の解説指導を受けました。例えば江戸博の地元の南本所横綱町などの土地問題に関するものや浅草聖天町、猿若町の土地の権利や年貢の争いごと、あるいは本芝の魚市場の縄張りの問題などを現代と照らして講義いただきました。

【報告】文：事業部会・伴野睦雄

江戸東京博物館友の会 見学会（2005/3/6）

常設展を見る ～火消年代記～

常設展をあらためてめぐる見学会『常設展を見る』が、3月6日（日）江戸東京博物館5階の常設展示室で行われました。見学会は友の会事業部会の黒瀬雅博さん（展示ボランティアガイド）の解説で、10時、13時、15時の計3回行われました。

「火事とは江戸の華」といいますが、今回は「火消年代記」というテーマにそつての展示解説でした。当日配布された資料には江戸三大大火や江戸三火消などの情報が、興味深いエピソードとデータで紹介されていて、まさに保存版といえる充実した内容でした。

常設展を“町火消”という特定の

仕組みと照らし合わせて再度見てみると、意外と火消関係の資料が多いことに驚かされました。やはり江戸は度重なる火災によってその姿形を変え、新たな文化を生み出してきた都市であるということが実感できました。

友の会会員にはお馴染みで見慣れているつもりの常設展ですが、参加者の



▲解説に聞き入る参加者

中には「こんな展示があったのか」と、ガイドさんの説明を受けて初めての発見をする人が続出でした。一見地味な展示物も説明を加えていただくと案外おもしろいエピソードのある史料だったりするものです。また、気が付かないうちに展示替えがおこなわれている箇所も、ガイドさんの案内と解説で見落とさずに楽しむことができました。

今回は「常設展」めぐりでしたが、まるで企画展を見たような新鮮な驚きと発見でいっぱいでした。今後は日頃からガイドツアーを大いに利用したいと思いました。

【取材】文・写真：広報部会・斉藤美香子

名横綱栃錦が愛した故郷・小岩を訪ねて

＜大相撲の史跡探訪＞ その2

改札を出ると等身大の土俵入り姿の栃錦像が迎えてくれます。JR小岩駅中央コンコースに鎮座する栃錦像は、終生故郷を愛し、母校を愛し、そして地元で愛され続けた江戸っ子横綱の大いなる功績の証でしょう。

見学会「大相撲の史跡探訪」第2弾は小岩駅周辺の横綱栃錦ゆかりの地を散策するという企画で、早春の絶好の日和のなか30名の参加者で3月26日(土)開催されました。

名人横綱と呼ばれ、引退後は年寄・春日野として後に相撲協会理事長となり両国国技館建設などにも貢献した第44代横綱栃錦は東京府南葛飾郡小岩村に生まれました。そして下小岩尋常小学校(現在の下小岩小学校)卒業後の昭和13年(1938)、13歳で春日野部屋に入門します。昭和29年(1954)横綱に推挙され初代若乃花幹

士との栃・若時代に数々の名勝負を残し、衰退していた相撲界に黄金時代を築いたことは余りにも有名です。

午後12時45分より2班に分かれて小岩駅を出発、10分程で下小岩小学校に到着しました。校内に入るとは出来ませんが栃錦の母校への思いの一つとして、40数年前母校が火災で焼けたとき校庭で勧進相撲を行い再建に協力するなど、今もその足跡が語り継がれています。

同校を後に千葉街道を横断して篠崎街道に向かって進んで行くと金色に輝く大きな観音像が見える萬福寺に到着します。ここは平成2年1月10日永眠した栃錦の菩提寺で、立行司の第26代式守伊之助(茶原宗一)のお墓もありました。

次に江戸川沿いの「影向の松」で有名な善養寺に向かいました。樹齢が



▲南小岩付近を歩く見学会参加者

600年を超え、横に枝を突き出した姿は横綱の土俵入りを思わせる「影向の松」の「東の横綱」命名には第27代立行司木村庄之助、春日野理事長(栃錦)を抜きにして語ることはできないでしょう。また昭和55年(1980)から平成2年まで境内で毎年行われていた子供相撲大会を指導、激励するなど、地元スポーツ育成にも力を注いでいた栃錦の郷里への思い入れを垣間見ることができました。

最後に善養寺境内に残る史跡や江戸川の風景を日に納めて2時間ほどの散策で小岩駅に戻り解散となりました。

【報告】文・写真：事業部会・安西洵

江戸博クリップ

渋いはなし

季節はずれのはなしで恐縮ですが、「食欲の秋」というだけあって秋はいろいろな食材が豊富で楽しいですね。

もちろん今だって春野菜が豊富で美しい色彩と香りがいっぱい(私は菜の花が大好きです)ですが、秋はキノコ類、魚、栗、そして柿などと、落ち着いた色と複雑な香りで楽しませてくれるものが多いように思います。

ちょっと前ですが、お菓子のモンブランを作ったとき、丹波のおいし

そうな栗が手に入ったので、渋皮煮とマロンペーストから作ってみたのです。ゆでたり焼いたりとはともかく、渋皮煮を作るのは初めてだったので、アクをすくっていたところ、ステンレスのクレードルがみるみる赤銅色にそまって、まるで銅のおたまのようになってしまったのには驚きました。

これは染物につかうしかない!と、思って、冷凍してあります。さて、どんな媒染剤でどう発色させましょうか?これがきっかけで、栗だけで

学芸員 平方正昭

なく、お茶や柿渋などにもはまってしまいました。

あ、モンブランですか?おいしかったですよ。トッピングした渋皮煮が良いアクセントになりました。

私・平方正昭は4月1日より、東京芸術劇場に異動いたしました。お世話になりました。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師などの館職員の方に執筆をお願いしています。

「足立史談会」を訪問 公民一体の 活動が軌道に



新聞でもその活動が紹介される「足立史談会」（以下「史談会」と略）の取材のため2月18日に足立区立郷土博物館を訪問しました。

お話を伺ったのは会長の安藤義雄さん、副会長の堀川和夫さんと矢沢幸一朗さんの3氏、友の会からは広報部会の松原良、菅沼和男、佐藤幸彦、オブザーバーとしての岩松精、玉木達二です。

「史談会」は昭和43年(1968)に足立区の歴史や文化財等の調査研究をし、区史の充実を図る目的で当初は同区内の小中学校の社会科の先生方が中心になって設立されました。

区史編纂を通しての反省として大事な資料のないことを痛感し、以後恒常的に歴史を調べ、蓄積することに努めてきました。

ただ、教師が4年で勤務校を替わ

る制度になり先生方の加入もままならず、郷土意識の低下もあって一時は500人もいた会員が現在では400人程度に減少し、その上、会員の高齢化が進むという悩みもあるそうです。

機関誌『足立史談』は創刊3号で経済的にいきづまり、教育委員会と相談の結果、印刷経費は教育委員会、編集は「史談会」という形をとることになり、現在第444号を数えています。毎月5000部が主に区内のいろいろな公共施設に配布されています。もう一冊の『足立史談会だより』も月刊ですが、「史談会」の行事(月例会、探訪会、講演会、研究発表会、史談大学)を中心に掲載し、会員のみに送られています。『足立史談』の復刻版、記念誌、このほか好評を博した『足立区(南足立郡)旧町村古道図』の発行など、その活動は多彩で大変活発です。なかで

も、年間10回程度実施される探訪会は311回にも達し、近県にも足を運ぶそうですが、江戸に関係した企画が人気のようです。

郷土博物館が設置されていなかった時代には、郷土資料室が区立中央図書館内にあり、その運営を「史談会」が担当して資料の展示なども行っていました。こうした経緯もあって区との連携は見事で、「公民一体」の体制がかなり以前から出来つつあったといえます。なんといっても「史談会」専用の部屋が博物館内に確保されていることはわれわれ友の会にとって本当にうらやましい限りでした。

【報告】文：広報部会・菅沼和男

写真：同・佐藤幸彦



◆役員会

2月10日(木)18時から開催。来期の役員選出に関し、「役員等候補者推薦委員会」からの最終報告(15名推薦)を了承した。また、菅沼氏より友の会セミナーの参加者についての分析結果が報告され、事業部会で活用してもらうこととした。出席10名。

3月10日(木)18時から開催。来期の役員候補に推薦された9名が出席、現役員と顔合わせを行った。広報部会から会報『えど友』の版下制作外注先の選定について報告があり、これを了承した。また昨年総会で提案され役員会預かりとなっていた友の会規約の字句修正案について審議し、現規約の字句修正は不要との結論になった。出席10名+9名。

会議・会合日誌

2004/2～2005/3

◆事業部会

2月3日(木)18時から開催。2月事業の確認、担当の決定などのほか、友の会セミナーにおける博物館との協力についての状況が報告され来年度後半に向けさらに努力していくこととした。出席17名。

3月3日(木)18時から開催。3月までの事業の確認、担当の決定のほか、16年度事業のまとめと17年度事業の計画案などを話し合った。出席19名。

◆広報部会

2月16日(水)15時から開催。『えど友』版下制作外注先候補3社の見積結果について検討し、部会の考え方に最もふさわしい1社を選定

した。さらに『えど友』第24号の確認、第25号の内容と分担などを話し合った。出席7名。

3月16日(水)15時から開催。『えど友』版下制作外注化に伴うデザイン見本・送稿手順の検討、第25号の進行状況の確認などを行った。出席8名。

◆総務部会

2月24日(木)14時から『えど友24号』などの発送作業を行った。出席10名。

3月31日(木)14時から『江戸博NEWS』などの発送作業を行った。出席8名。

◆3部会合同懇親会

3月24日(木)17時からレストラン・モアで開催。1年間の活動を振り返りながら、各部会メンバーの交流を図り懇談した。出席27名。

源内さんの江戸博さんぽ 其の4

友の会会員の 投稿欄

東京にある富士山のナゾ

米山 彰

我庵は松原つづき海ちかく
富士のたかねを軒端にぞ見る

長祿元年(1457)に江戸城を築いて居城とした太田道灌の歌です。江戸の住民もまた毎日富士山を眺めて生活をしていたのでしょう。

天正18年(1590)徳川家康が入城した時の江戸城は本丸の建物もこけら葺で、玄関の式台は船底板が三枚並べられているだけであったといわれます。

当時の江戸は城の東側は一面汐入りの葦原で使える土地は10町(約9.91ヘクタール)ほど、南西はでこぼこでその先は武蔵野の草原が限りなく広がっていたそうです。

家康は、慶長8年(1603)に將軍職に就くと諸大名に命じて江戸城城郭の造営と神田山などを崩しての大規模な海岸埋め立て工事に着手しました。

江戸の住民は、関ヶ原の合戦の結果は知っていたでしょうし、江戸が国の中心になるという期待もあったと思われますが、それから数年の江戸の町の変化に対処することは大変だったと思います。

しかし、江戸の人口が増加し、いろいろの職業人が諸国から入ってくれば情報も伝わり、江戸の町の繁栄とともに住民の生活も豊かになって、徳川將軍家はありがたい存在と思う気持ちが広がったと思うのです。そんな時、將軍の旧領国の駿河から富士山信仰のお札を頒布しながら、その信仰の普及と富士山参りの際の宿舎の提供・祈祷・案内のための「講」を立ち上げることを勧誘する「御師」と呼ばれる祈祷師たちが江戸の町を回って歩きました。

多くの住民は一度は富士の山頂に立って見たいと願望していたにちがいないと思います。そして町々に「富士講」ができていきました。

この「富士講」の江戸における遙拝所が「富士塚(富士山)」で、現在も都内各地の寺社にあり「お富士さん」とよばれて土地の人の信仰の対象になっていますが、江戸中期には小富士を築いて拝し、江戸後期には「江戸八百八講」とうたわれるほどにふくれあがり、多くの富士塚が富士講の手で造山されました。

江戸の富士信仰は「元朝の見るものにせん富士の山」の句でうかがえるように徳川開府三百年來の江戸市民と富士山のつきあいが根底にあつてのことと思います。そこに富士講が生まれ、見るばかりの山に誰でも登れるようになり、江戸人と富士山の間はさらに親しいものになりました。



こうした富士信仰(というより富士への憧憬)は、明治・大正と受け継がれてきましたが、現在は衰微してしまい、毎年7月1日の山開きの日に祭礼がおこなわれている富士塚は、戦災で焼けなかった地域を中心にしたいくつかの講にすぎないという状況になってしまいました。

東京都内の富士塚は40以上健在であるとのことですが、わたしが歩いて見つけたうちのいくつかを以下に記載しますので興味のある方はその他の富士塚も探していただきたいと思います。

- | | |
|------------|----------|
| 1. 中央区湊 | 鉄砲洲縮荷 |
| 2. 品川区北品川 | 品川神社 |
| 3. 文京区大塚 | 護国寺 |
| 4. 台東区下谷 | 小野照崎神社 |
| 5. 渋谷区千駄ヶ谷 | 千駄ヶ谷鳩森八幡 |

参考文献

『富士講の歴史』岩科小 郎著 名著出版



会員の自主的サークルとしての「えど友サークル」の最近の活動状況をご紹介します。

* 江戸三十六見附を巡る会 *

◆3月27日(日)に第3回の見附めぐりを開催。今回は飯田橋から赤坂見附までのコースで、コース途中にある史跡はなるべく割愛して四つの御門(牛込、市谷、四谷、赤坂)の城門跡を検証する見学会となった。コースは飯田橋駅から牛込揚場跡碑、牛込橋、神楽坂、善国寺、牛込城跡を見て、再び飯田橋駅に戻りJR線を見下ろす外堀土手公園道から牛込見附跡、市ヶ谷見附跡、四ツ谷見附跡、喰違見附跡へと進み、ホテルニューオータニからは再度街中に入り紀尾井坂、清水谷公園、弁慶橋を経て赤坂見附跡で締めくくった。

参加者は16名。おおよそ6キロ、2時間30分にわたるコースで、見附跡検証は午後3時30分無事終了した。赤坂見附駅近くの喫茶店で有志(12名)による反省会を兼ねた懇談会を行った。

* 落語・講談を楽しむ会 *

◆2月22日(火)に第4回会合を開催。今回はテーマを「上野広小路亭(講談)と湯島天神梅祭り」とし、講談「秋色桜」の舞台となった江戸時代の上野と講談・落語に縁の深い湯島天神を見て歩き、上野広小路亭で講談を鑑賞した。清水観音

堂では「秋色桜・秋色句碑」を見て、黒門跡、五条天神跡などを散策した後、梅祭り開催中の湯島天満宮に参詣、上野広小路亭では日本講談協会の「女流の集い」で講談を楽しんだ。参加4名。

◆3月22日(火)に第5回会合を開催。今回のテーマは「落語と花見」。前回に続いて上野の散策で、東照宮を見たあと、上野公園中央の噴水のあたりでかつて寛永寺の境内だったところの古地図を見ながら昔の位置などを確かめたりした。上野広小路亭では「しのめ寄席・二ツ日勉強会」で「長屋の花見」、「抜け雀」などの落語を聞いた。参加8名。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名、④住所、⑤電話番号、⑥Eメールアドレスをご記入の上、友の会事務局へお申込みください。

申込先 130-0015 東京都墨田区横網 1-4-1 江戸東京博物館友の会事務局
Tel. 03-3626-9910

●新規サークルを設立される方も引き続き募集中です。ご希望の方は事務局(上記)へ関係資料をご請求ください。

伝統行事・芸能を訪ねて

黒瀬雅博

王子の狐火

おおみそか

大晦日の午後11時、ここは王子の装束稲荷の前。

地下鉄の『狐の行列』のポスターに引かれて、雪の後にもかかわらず、写真を撮りに行きました。

怪しげに光る車道脇に連なる『狐火』とかかれた提灯のともし火。祭囃子の太鼓も出番を待ちます。旗には王子装束稲荷奉賛会『こぎつね連』、王子狐の行列の会の設立団体とか。設立のきっかけは、広重の名所江戸百景の『王子装束の木大晦日の狐火』をテーマに狐火の再現を形にしました。

由来は、江戸時代、大晦日の晩になると、王子にあった一本の大きな榎を、狐火が取り囲んだ。それは、関東一円のお稲荷様から使者の狐が榎の下に集まり、装束を整え、関東総社である



王子稲荷神社に詣でていた。その狐のともした尾火の数で王子の人たちは、翌年の占兆を占ったという伝説です。

歌舞伎・文七元結

新春の歌舞伎は団十郎復帰の新橋演舞場へ行きました。『人情噺文七元結』という、落語に題材をとった演目。名人三遊亭円朝の噺を脚色した舞台を、菊五郎・田之助の名コンビが演じました。

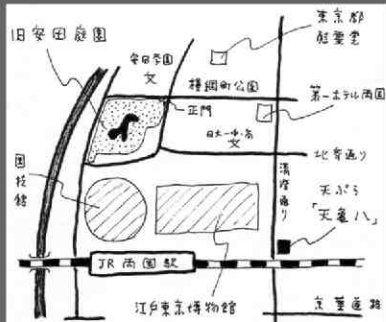
私の関心は、噺家とその題材となった落語のストーリーです。例によって、困った時の神田神保町の豊田書店。案の定、私のような物好きなお客のために、店先に積み上げられた雑誌『落語界』。創刊2号(昭和49年=1974/2月号)に、特集記事「文七元結におけ

る圓生・正蔵の演出法」。まんまと買わされてしまいました。

これが落語の第一級である訳は、登場人物も多く、その人物設定、情景描写も至難の業で、当時、「圓生・正蔵両師以外に本格的にこの噺を演じられない」とまで評しています。しかし、両師の演出方法は、芸風が異質で、取り組み方、解釈の仕方が違うとある。圓生は、冗舌ともいえるくらいの克明な描写となテクニック。一方、正蔵は律義な性格そのままに、渋い、硬い口調で、聴衆を自分の世界に引きずり込み、完ぺきな作品に仕上げています。中に、2人の話が2段構成で比較されています。

2005年3月21日、故林家三平の長男・こぶ平(本名・海老名泰孝)が9代目正蔵を襲名しましたので、いつか、聞ける日がくることを楽しみに、今は昔の録音で楽しむことにしましょう。

【旧安田庭園と天ぷら・天亀八】



旧安田庭園

江戸博から徒歩5分ほどの場所に隅田川の水を引いた潮入の回遊式庭園があります。元禄年間(1688～1703)の大名庭園を復元した旧安田庭園(墨田区横綱1丁目12番1号)です。

明暦3年(1657)、正月18日から翌19日にかけて起こった大火災(振袖火事)によって、江戸は壊滅的な打撃を受けました。市街の6割が焼失し、死者は107,000人におよんだと言われます。

明暦の大火後、幕府は江戸改造計画に着手します。本所・深川一帯の開発が行われ、低湿地帯だったこの庭園の辺りも武家地として整備されました。

旧安田庭園は、5代將軍綱吉の生母桂昌院の実弟で、後の常陸笠間藩主本庄因幡守宗資が屋敷を構えた所だと言われています。

嘉永年間(1848～1853)に、一時的にいくつかの小屋敷に分割され、安政年間(1854～1859)に再び本庄氏の所有になりました。

この時に隅田川の水を引き、粋をこらした回遊式庭園が造られたのです。小規模ではありますが、隅田川をのぞむ景勝の地で、庭園の中央には潮の干満で異なる風景を見せる心字池(約



2,000平方メートル)がありました。

明治(1868)になって、岡山藩主池田景政の屋敷になり、後に安田財閥の創始者である安田善次郎氏所有になりました。安田氏は大正11年(1922)に刺殺されますが、故人の遺志により東京市に寄付されました。民間篤志家の寄付により一般公開された最初の和風庭園なのです。

その後、関東大震災や太平洋戦争で荒廃しましたが、昭和42年(1967)4月東京都から墨田区に移管されます。当時は公害で汚れ、樹木の老齢化が目立っていました。墨田区では、名園復元のため、丁寧に調査を行い、同44年(1969)8月から約2年をかけて、全園の改修工事を実施しました。

このとき、約800トンの浄化装置付貯水槽からポンプで給排水を行って、実際の潮の干満と同じように、中ノ島の浮き沈み、沢飛石の見え隠れなどを人工的に見せるようにしました。しかし、現在はポンプが故障していて、常に干潮の風景が展開されています。沢飛石を渡りながら、少し離れた所にある朱塗りの太鼓橋を眺めて、大名気分にはたってみるのもいいでしょう。

その他の見所は、史跡駒止石と駒止稲荷。樹木はクスノキ、夏から秋にかけて小さな花が群がり咲くサルスベリ、カヤ、モクレン科のタイザンボク、ヤマモモなど。株ものでは、アオキ、ヤツデ、ジンチョウゲ、ヤマブキが植え込まれています。心字亭は園内の北側、日当たりの良い場所にあります。一休みするにはちょうどよい所です。「おとしよりの憩いの家」をかねています。

総面積 約14,000平方メートル
開園時間 午前9時～午後4時30分
休園日 12月29日～翌年1月1日
入場無料

てんぷら・「天亀八」

清澄通りに面した、てんぷらの「天亀八」は、今年で創業56年になります。社長は2代目。



1番の人気は、かき揚げ丼です。ランチタイムでは比較的手頃な値段で食べられるので、近くの会社の人たちで満員になります。

「おいしいてんぷらを、リーズナブルな価格でと考えました」おかみさんが江戸弁で話してくれました。

江戸時代から食べ始められたてんぷらは、最初は辻売りで庶民の食べ物でした。屋台の店が往来へでるようになったのは、天明5年(1785)からです。

江戸前のてんぷらはごま油ということになっています。味も香りも非常にいいからです。「天亀八」では、小麦粉もごま油も極上の品を使っています。お米は天日干しのものを農協から直接仕入れているそうです。みそ汁のみそは東京の人に合うように、名古屋と越後を混ぜた赤出汁でさっぱりとしています。お新香は、三浦大根で今の季節では48時間漬けています。

てんぷらの材料は毎朝仕入れるので新鮮です。大きな車エビは3年物。成熟した方が味がいいのです。

売り物のかき揚げ(エビとイカと野菜)は、口に入れるとふわっとした触感の中に、カリッとした歯ごたえがあります。かき揚げは1番技術がいるとか。形を作るのが、大変なのだそうです。

小部屋や座敷もあり、くつろげるお店です。かき揚げ丼(みそ汁・お新香付き)1,785円より、てんぷら盛り合わせ1,365円より、ランチタイム天丼1,050円。

営業時間 午前11時～午後2時、午後5時～午後9時。毎週月曜日が休み(月曜が祭日の場合は火曜日)。東京都墨田区亀沢1-7-1 電話 03-3622-7351

【取材】文：広報部会・岡橋園子

写真・地図：同・松原良

「旧銀座れんが街と周辺の史跡探訪」

- ◆明治5年(1872)の大火の後、明治政府により不燃家屋としてれんが造りの街並みが建設されました。文明開化の象徴である旧れんが街と併せて周辺の史跡を探訪し、江戸・明治の銀座をしのんでいただきます。
- ◆銀座にふさわしいオプションとして「ライオン」の特別ルームでの懇親会を用意しました。会費 3,000 円(追加飲み物代は各自支払い)。
- ・開催日：5月7日(土) 13:00～
- ・集合場所：J R新橋駅(12:45 までに集合のこと)
- ・申込：締切りしました。
- ・ご注意：オプションのキャンセルは5月2日(月)まで、以後のキャンセルは集金させていただきます。
- ・定員：80 名、同伴者可(はがきに氏名連記)
- ・参加費：会員、同伴者とも 500 円(当日払い)

【企画担当責任者】 藤村武雄(事業部会)

「北関東の小江戸—栃木市の蔵造り街探訪」

- ◆小江戸の一つとして知られる栃木市を訪れ、魅力ある古い蔵造りの街、そしてそこに残る江戸と栃木の水運の歴史などを探訪します。予定コースは、塚田歴史伝説館、山車会館、蔵の街観光館、山本有三ふるさと記念館、蔵の街美術館、横山郷土館、旧栃木県庁舎、岡田記念館などです。今回は現地集合・現地解散となります。
- ・開催日：5月21日(土) 11:00～
- ・集合場所：東武日光線・栃木駅(10:45 までに集合)
(参考 東武・浅草駅 9:10 発の快速電車が便利です)
- ・申込：5月8日(日)必着
- ・定員：60 名、同伴者可(ハガキに氏名連記)
- ・参加費：会員、同伴者とも 2,000 円(当日払い)
(入館料等 1,500 円を含む、概算)

【企画担当責任者】 岩松精(事業部会)

「江戸四宿を歩く—品川宿その2」

- ◆テーマ企画「江戸四宿を歩く」の第3回は第1回に歩いた品川北宿に続いて南宿をめぐることにしました。前回に続き品川宿の散策をお楽しみください。
- ・開催日：6月11日(土) 13:15～(集合 13:00)
- ・申込締切：5月31日(火)
- ・定員：80 名、同伴者可(ハガキに氏名明記)
- ・参加費：会員・同伴者とも 500 円(当日払い)
- ・集合：京浜急行・「新馬場駅」

【企画担当責任者】 玉木達二(事業部会)



友の会セミナー

第31回 「武士の家計簿」

—加賀藩御算用者の幕末維新—

講師 磯田道史さん(茨城大学人文学部助教授)

- ◆時代は幕末から明治維新。国内が大きく変貌する世の中にあって、加賀藩の「御算用者」であった猪山家の生活がどのように変貌していったか、「猪山家文書」をモチーフに講演いただきます。丁寧に解説分析され、当時の武士たちの生活が生き生きと伝わります。著書『武士の家計簿』は作家の阿川弘之氏にも高く評価され、平成16年度「新潮ドキュメント賞」を受賞されました。セミナーに参加される方は、事前にご一読されると講演がさらに面白くなることでしょう。

○講師略歴：いそだ・みちふみ

茨城大学人文学部助教授。著書に『武士の家計簿』(新潮新書)など。

- ・開催日：6月26日(日) 14:00～15:30
- ・申込締切：6月14日(火)必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・定員：100 名、同伴者可(ハガキに氏名連記)
- ・参加費：会員・同伴者とも 500 円(当日払い)

【企画担当責任者】 大倉和寿(事業部会)

お申込み方法

- ◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)、④〒住所、⑤電話番号を明記して下記の「友の会事務局」へ。
- ◆締め切り：各催事の案内をご覧ください(必着)。
- ◆お申込みは、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
- ◆お申込み先：〒130-0015 東京都墨田区横綱 1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

- *お申込みいただきますと、折り返し「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
- *「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく水曜日から金曜日にお問い合わせいたします。
- *「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込みをしてからご参加ください。

古文書講座

今年度も3講座制で6月より開講

平成17年度の古文書講座は昨年度同様「入門編」「初級編(1)」「初級編(2)」の3講座となります。受講方法もまた前期同様です。

「初級編(1)」と「初級編(2)」はほぼ同レベルですので、初級編への参加は1講座のみとさせていただきます。

「初級編(1)」または「初級編(2)」のどちらかを選び受講してください。

「入門編」は「初級編」の(1)か(2)のどちらかを受講する方、どちらも受講しない方のいずれも応募することができます。

☆今まで継続して受講されている方も、今回は締切日までに希望講座を明記し、改めてご応募ください。

☆入門編と初級編(1)の第1回の日時のみが午前中となっていますのでご注意ください。

*入門編 第1期

- ・開催日：第1回 6月8日(水) 10:00～12:00
第2回 7月6日(水) 14:00～16:00
第3回 9月21日(水) 14:00～16:00

- ・会場：いずれも 江戸東京博物館・1階会議室
- ・講師：小宮山敏和さん(学習院大学大学院史学専攻)
- ・定員：80人
- ・参加費：全3回 1,500円(初回当日払い)
- ・申込締切：5月17日(火)必着

*初級編(1)第1期

- ・開催日：第1回 6月15日(水) 10:00～12:00
第2回 7月13日(水) 14:00～16:00
第3回 9月21日(水) 17:00～19:00

- ・会場：いずれも 江戸東京博物館・1階会議室
- ・講師：野尻泰弘さん(学習院大学大学院史学専攻)
- ・定員：80人
- ・参加費：全3回 1,500円(初回当日払い)
- ・申込締切：5月31日(火)必着

*初級編(2)第1期

- ・開催日：第1回 6月25日(土) 14:00～16:00
第2回 7月30日(土) 14:00～16:00
第3回 9月24日(土) 14:00～16:00

- ・会場：いずれも 江戸東京博物館・1階学習室
- ・講師：小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)
- ・定員：50人
- ・参加費：全3回 1,500円(初回当日払い)
- ・申込締切：6月7日(火)必着

【企画担当責任者】伴野睦雄(事業部会)

会員優待のお知らせ

好評開催中!

●企画展「新シルクロード展」

会期 2005年4月16日(土)～7月3日(日)

休館日：月曜日(ただし5月2日は開館)

図録 定価：2200円、会員割引10%(物販所のみ)

会員：一般650円、65歳以上320円、大専門生520円

同伴者：一般1040円、65歳以上520円、大専門830円

次回予告

●企画展

発掘された日本列島 2005 新発見考古速報展

会期 2005年7月12日(火)～8月21日(日)

好評開催中!

第2企画展ご案内

●「ある幕臣の幕末明治—井上廉と川村帰元」

開催期間 2005年4月15日(金)～5月29日(日)

以後の予定

●「平成16年度収集 新収蔵品展」

開催期間 2005年6月28日(火)～7月24日(日)

●「歌舞伎役者への追慕・死絵の世界」

開催期間 2005年6月28日(火)～7月24日(日)

(上記2企画は同時開催の予定ですが、変更になることもあります)

投稿を歓迎! 自由なテーマでお気軽に

会員の皆さまからの投稿をお待ちしています。お気軽にご応募ください。原稿には、お名前、〒住所、会員番号、電話番号を明記の上、できれば顔写真を添えて、友の会事務局まで。採用分には記念品進呈

江戸東京博物館友の会 会報<えど友>第25号
平成17年5月1日発行
奇数月刊。次号は7月1日発行予定

編集・制作：友の会広報部会

〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910

発行人：大松駿一(副会長) 編集主幹：松原 良

編集人：菅沼和男、岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美、

小柳英二郎、斎藤美香子、稲垣武志、岡田守弘